

資料

成人看護学実習における看護学生の困難に関する国内文献検討 —周手術期にある患者への実習に焦点をあてて—

Nursing students in adult practicum : lessons from literature and implications for future training

佐藤由美子¹⁾

Yumiko Satoh

キーワード：看護学生、成人看護学実習、周手術期、困難

Key words : Nursing student, Adult nursing practicum, Perioperative, Difficulty

要旨

本研究の目的は、成人看護学実習（周手術期）における看護学生の困難について、国内の先行文献から明らかにすることである。8件の対象文献より、「成人看護学実習（周手術期）における看護学生の困難」について述べられている内容を抽出し、分類・整理した。結果、【状態変化への困惑】【術後対応の苦境】【実習環境による影響】【事前・事後学習の不足】の4つのカテゴリーに分類された。学生は手術侵襲による身体的側面の状態変化や術後の対応に多くの困難を感じていたことが分かった。教員は学生の不安を受け止めつつ、ロールモデルを示す指導が有効であることが再認識された。また、心理的及び社会的側面に関する困難は少数であったが、単に困難を感じていないのではなく、短い実習期間において十分に情報収集ができないことや対応が難しいことが推察された。

I. 緒言

近年の医療技術の進歩に伴い、身体への負担が少ない内視鏡手術や腹腔鏡手術などが増え、在院日数が短縮している（厚生労働省、2017）。周手術期にある患者を対象とした成人看護学実習においては、看護学生が一人の患者を受け持つ期間が短くなる。その結果、学習にスピードが求められると考える。

周手術期にある患者は、手術侵襲による急激な状態変化が起こり、身体的・心理的・社会的側面に様々な影響を受けている。看護学生は、手術前後の患者の変化や手術侵襲の大きさに怖さを感じていることが明らかとなっている（高比良・山田・吉田・片野穂・松本、2016）。

初学者である看護学生にとっては、在院日数の短縮により実習展開が早くなることに加えて、手術侵襲による急激な状態変化に対応していく課題が増える。それによって実習の難易度はより高くなり、患者と関わる過程で様々な困難を生じることが予測される。

杉森ら（2012）は、看護学生が実習で自分とは異なる発達段階にある人々を深く理解し、経験したことのない人間の生病老死にかかわる問題に直面していると述べている。実習で自分とは違う考えや意見に直面した経験の少ない学生は、自己否定と捉えることがある（三浦、2006）。また、失敗したと感じたまま実習を終えた学生は、実習中に生じた疑問の解決や看護実践の意味づけができず、

1) 川崎市立看護短期大学 Kawasaki City College of Nursing

自信が持てなかった(中谷、2004)。このように看護学生にとって看護学実習とは、学生自身の価値観までを揺るがされるほど難しい学習であると考えられる。よって、学生が実習中の学習を進めるにあたり、教員や臨床指導者によるサポートが重要な支えとなる。安酸(2015)は、教員は学生が困ったり気になったりしていることは何かを知ることが重要であると述べている。これは、教員が学生と共に体験を振り返り、意味づけすることができれば、単なる困難な体験で終わらず、その後の患者との関わりに活かされる体験へと発展させることができる。また、これらのプロセスを踏むことで学生の自信や達成感につながると考えられる。

先行研究には、成人看護学実習における看護学生の困難に焦点を当てた文献レビューはあったが、急性期、慢性期、終末期が混在されていたもの(千田、2011)、学習困難に関するもの(福本、2014)、他領域の実習と比較したもの(中本、2015)であった。他には、術直後の観察場面や清潔援助などの特定の場面での困難が明らかとなっていたが、成人看護学実習(周手術期)における看護学生の困難を整理したものは見当たらなかった。本研究で整理することで、成人看護学実習(周手術期)における今後の実習指導の示唆を得ることが期待できる。

Ⅱ. 研究目的

周手術期にある患者を対象とした、成人看護学実習における看護学生の困難について、国内の先行文献から明らかにすること。

Ⅲ. 用語の定義

成人看護学実習(周手術期): 生体への侵襲が大きい外科的治療を必要とする対象を通して、急性期からの回復過程を理解する授業とする。
困難: 成人看護学実習(周手術期)において看護学生が難しい、戸惑い、不安、混乱などの身体的・精神的に負担に感じたこととする。

Ⅳ. 研究方法

1. 文献検索

医学中央雑誌 Web 版を用いて、「臨地実習」AND「看護学生」AND「周手術期」OR「手術後」OR「術後」OR「急性期」をキーワードに発行年は限定せず会議録を除いて、2019 年 1 月 18 日に検索を行った。また、文献のタイトルから成人看護学実習(周手術期)ではないもの、文献レビュー、研究対象者が看護学生ではないもの、結果に看護学生の困難に関する記述がないものは除外した。

2. 分析方法

対象文献の結果に「成人看護学実習(周手術期)における看護学生の困難」について述べられている内容を抽出した。それぞれの文献を精読し、述べられている困難は可能な限り抽象度が同程度のものを抽出した。その際、文脈の意味を損なわないように努めた。カテゴリー化については、各コードの原文の意味内容の誤解がないように注意し、内容の類似性に沿った。データの分析には質的研究の経験を有する研究者からスーパーバイズを受けて、妥当性の確保に努めた。

3. 倫理的配慮

対象文献からの内容抽出について、研究者の意図した内容を正確に読み取れるように注意しながら精読し、論旨および文脈の意味を損なわないように抽出するよう最大限配慮した。

Ⅴ. 結果

1. 成人看護学実習(周手術期)に関する国内文献の動向(表1)(図1)

検索した 256 件のうち、文献のタイトルから成人看護学実習(周手術期)ではないもの、文献レビュー、研究対象者が看護学生ではないものを除外し、95 件に絞られた。次に、研究結果に看護学生の困難に関する記述がないものを除外した結果、8 文献を対象とした。

成人看護学実習(周手術期)における看護学生に焦点を当てた文献は、2001 年から 2018 年の間

表 1 研究対象 8 文献の研究目的

文献番号	発行年(西暦)	文献名	著者	研究目的
1	2016	看護学生が認知する術後観察場面での看護師の関わり	高比良祥子, 山田貴子, 吉田恵理子ら	学生が手術後の患者の観察を行う場面で、看護師の関わりをどのように認知しているのかを明らかにし、学習環境調整に向けた示唆を得る
2	2016	看護学生が抱く手術直後患者の観察における困難感と対処	高比良祥子, 吉田恵理子, 片穂野邦子ら	成人看護学実習において、学生が手術直後の患者の観察を行うときに、どのような困難感を抱き、どのように対処しているかを明らかにし、周手術期看護実習に関連した教育方法への示唆を得る
3	2015	看護学生の看護実践力獲得に関する認識の検討	菱刈美和子, 石渡智恵美, 菊地きよ美	周手術期・回復期実習の体験における看護実践力の獲得に関する認識を調査し、その特徴を明らかにし、今後の学習支援や教育方法の示唆を得る
4	2014	周手術期看護実習の体験を通して学生が振り返った学びの検討	橋本茂子, 黒田裕美	DPC 制度/PDPS を導入している施設における周手術期看護実習の体験を通して学生が振り返った学びの現状を把握することを目的とする
5	2013	周手術期実習における看護学生と患者の援助関係の形成要因	広松美和	周手術期実習における看護学生と患者の援助関係の形成に関する要因を明らかにする
6	2008	看護系大学生の手術直後患者清拭実施に伴う不安や戸惑い	徳川陽子, 藤田倫子	学生が手術後 24 時間にある受持患者への清拭実施前日と清拭実施中に生じた不安、戸惑い、混乱、疑問はどのような内容であったかを明らかにし、学生が問題解決の思考をふめるための指導方法を考察する
7	2006	手術期看護実習が学生にとって「大変」な意味の構造	坊垣友美	学生にとって「大変」な実習体験とは何か、個人的な「大変」の意味構造を学生の実習イメージから明らかにする
8	2003	学生の課題レポートを用いた成人周手術期実習の教授活動に関する検討	桑子嘉美	学生が実習の最後に実習全体の学びを記述した内容を把握し、今後の教授活動について検討する

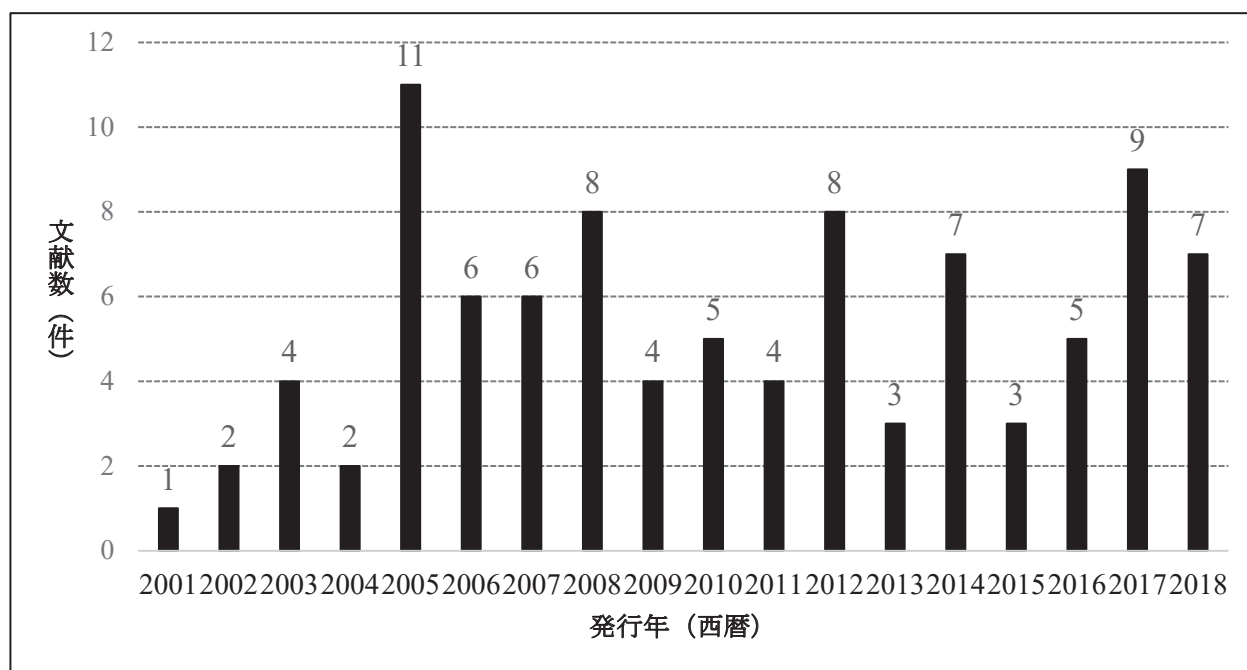


図 1 成人看護学実習（周手術期）における看護学生を対象とした国内文献の動向

に 95 件あった。年ごとに文献数にバラつきは見られた。
られるものの、毎年研究がなされていることが示

2. 成人看護学実習（周手術期）実習における看護学生の困難（表2）

8 文献を分析した結果、60 コードから 10 サブカテゴリーが見出され、【状態変化への困惑】、【術後対応の苦境】、【実習環境による影響】、【事前・事後学習の不足】の4カテゴリーに分類された。

以下、【 】はカテゴリーを、< >はサブカテゴリー、[] はコードを示す。

1) 【状態変化への困惑】

このカテゴリーは7コード、1サブカテゴリーから構成された。

<手術による状態変化に戸惑う>とは、患者の手術侵襲や術前と術後の状態変化に戸惑いがあり、事前学習と実際の患者のイメージの差を感じていた。また、学生が患者に触れることで状態が変化しないか不安に思っていた。

2) 【術後対応の苦境】

このカテゴリーは42コード、6サブカテゴリーから構成された。

<手術による状態変化への対応ができない>とは、患者の急変や異常などの状態変化への対応が分からなかった、実際に患者の状態変化や手術による生活や心理的な影響について対応ができなかったと感じていた。

<術後の観察に戸惑う>とは、術後の覚醒状態や状態の変化に合わせた観察に戸惑いがあり、学生の観察により患者に影響を及ぼすのではないかと不安を感じていた。また、どのように観察をしたら良いのか分からないと感じていた。

<術後の苦痛の対応に不安がある>とは、術後の疼痛などの苦痛に対してうまく対応ができなかった、学生の援助によって患者の苦痛を増強させるのではないかと不安に感じていた。

<離床の対応に戸惑う>とは、患者の疼痛の増強に不安を感じ、患者に術後の疼痛があるのに離床を進めなければならない状況に戸惑っていた。

<ドレーン・ルートの管理>は、ドレーンやルートの挿入中の管理や援助について分からず戸惑

っていた。また、チューブ類の抜管や学生のルート管理によって患者に悪影響を与えるのではないかと不安を感じ、チューブ類の絡まりに対して混乱していた。

<清潔援助に関して戸惑う>とは、初めての術後の清拭援助に戸惑い、患者の状態に合わせて工夫ができなかった、衣類で傷つけないか心配していた。

3) 【実習環境による影響】

このカテゴリーは8コード、2サブカテゴリーから構成された。

<短期間での実習展開が難しい>とは、実習もしくは患者の受け持ち期間が短いことで看護過程を展開すること、患者と関わりを持つことに難しさを感じていた。

<看護師との対応に戸惑う>とは、学生の疑問に対して看護師から十分な指導を受けられない、看護師と学生の知識や技術に差があることで戸惑いを感じていた。また、病棟の雰囲気がせわしく感じ、気を使っていた。

4) 【事前・事後学習の不足】

このカテゴリーは3コード、1サブカテゴリーから構成された。

<事前・事後学習が足りない>とは、日々の自己学習に追いつかない、手術による合併症と観察項目の理解や術後の正常・異常の判断に関する学習が不足していると感じていた。

VI. 考察

1. 成人看護学実習（周手術期）における看護学生の困難：身体的側面

術後の様々な援助場面において、患者の身体的側面への対応に多くの困難を感じていたことが明らかとなった。対象文献の研究目的に、手術直後の観察場面や清潔援助場面に焦点を当てたものがあり、身体的援助に関する多数のコードが抽出されたことも要因であると考えられる。

【術後対応の苦境】の<手術による状態変化への

表2 「成人看護学実習（周手術期）における看護学生の困難」の分析結果

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	文献番号
状態変化への困惑	手術による状態変化に戸惑う	術前と術後の患者の変化にギャップを感じる	2
		事前学習と実際の術後患者はイメージの差がある	2
		手術後の患者を見て混乱する	2
		麻酔や手術の侵襲の大きさに驚く	2
		手術侵襲を受けた患者を見て怖いと思う	2
		患者に触れることで状態が変化しないか不安に思う	2
		患者さんの変化に戸惑った	5
術後対応の苦境	手術による状態変化への対応ができない	異常や急変が起こったら自分には対応できない	2
		退院後の生活への具体策が提供できなかった	4
		手術のことなど心理的な面についてどう尋ねていいかわからない	5
		患者の変化にどのように対応していけばいいかわからず困惑した	5
		急変時の対応にパニックになり患者の安全へ配慮できなかった	8
	術後の観察に戸惑う	術後合併症予防に関する観察の必要性は理解できても判断力不足のため患者の変化に対応できなかった	8
		術後観察への不安や緊張、自信のなさがある	1
		手術見学直後で緊張や疲労が強く放心状態で観察についていけない	2
		観察項目が多く状況の変化に焦り準備しても漏れがある	2
		覚醒状態の確認の方法がわからない	2
	術後の苦痛の対応に不安がある	覚醒状態をどう判断してよいかわからない	2
		麻酔直後で返答がなく観察の協力が得られない	2
		観察の間違いや見逃しにより異常の発見が遅れる不安がある	2
		学生の観察技術により感染リスクが高まる不安がある	2
		術後の悪寒戦慄への対応に戸惑う	2
	術後の苦痛の対応に不安がある	患者の痛みうまく対応できない	2
		手術創部周囲の聴診や触診で痛みを誘発する不安がある	2
		患者の個別状況や苦痛、疼痛の緩和を図りながらケアができない	3
		患者の不安や悲しみなどの介入に悩んだ	4
		痛みで苦しんでいる時に何をしたらよいのか、何ができるのか困惑した	4
	離床の対応に戸惑う	痛み時の対応方法への不安	6
		創周囲の清拭時の痛みへの不安	6
		苦痛を増強させないか不安	6
		苦痛の緩和の援助を患者に断られ実践できなかった	8
		離床を進めなければならないが患者は疼痛の訴えがありどちらに援助を行うべきかという葛藤が起きた	5
	ルートやドレーン類への対応に不安がある	痛みがあるため動かさないほうがよいのか戸惑い	6
		動くことによる痛み増強の不安	6
		患者が痛いと言っているのに離床を促さなければならず、どちらを優先していいかわからなくなった	7
		多くのルートやドレーンが挿入された患者への対応がわからない	2
		医療機器やドレーン類の観察技術がわからない	2
実習環境による影響	短期間での実習展開が難しい	自分がルートの扱いを誤ると患者に悪影響を与える	2
		創部、ドレーン排液の色や状態の判断に悩む	2
		創部のある患者の心電図電極装着に戸惑う	2
		チューブ類の抜管に対する不安	6
		脱衣時のチューブ類の絡まりに対する不安	6
	清潔援助に関して戸惑う	チューブ類が絡まり混乱	6
		チューブやドレーン挿入中の清拭に対する不安	6
		創部やドレーン挿入部周辺の拭き方がわからなくて怖い	6
		ドレーン・チューブ類のトラブルに対する不安や混乱	6
		術後患者への初めての清拭での戸惑い	6
	看護師との対応に戸惑う	術後患者の状態がわからず清拭での工夫の戸惑い	6
		衣類で傷つけないか心配	6
		短期間でのコミュニケーションをどのようにとれば良いかわからない	4
		短期間での看護過程は難しい	4
		短い時間での情報収集やケアの難しさ	4
	事前・事後学習の不足	いつ退院してもおかしくない状態で切羽詰まってあせった	7
		受け持ち患者が手術前日に入院したため、術前看護のオリエンテーションや訓練が実施できなかった	8
		看護師の観察の事前・事後に十分な指導が得られないことや、疑問に関する確実な答えが得られない	1
		手術の日は病棟全体にせわしないので忙しい雰囲気を使う	1
		看護師が求めるレベルと学生の知識や技術のレベルに差があり、気後れや聞きづらさ、学生がどのタイミングでどこまで観察してよいか戸惑う	7
	事前・事後学習の不足	合併症と観察項目のつながりの理解不足がある	2
		正常・異常時の説明ができない	3
	事前・事後学習の不足	日々の変化に学習が追いつかなかった	8

対応ができない>、<術後の苦痛の対応に不安がある>は、複数の対象文献からコードが抽出され、生成されたサブカテゴリーであるため、多くの学生が感じている困難であると推察される。また、<事前・事後学習が足りない>と感じており、学内の講義や演習ですでに学習していたとしても、手術患者と関わったことが少ないため、患者の手術前後の変化に混乱した（高比良・吉田・片穂野・松本・山田、2016）と同様のことが言える。すなわち、患者の状態が複雑かつ急激に変化する周手術期においては、いくら事前学習をしても患者の状態変化を理解し、対応するのは難しいことが分かった。

次に、学生は実際に援助を行うにあたり、[患者に触れることで状態が変化しないか不安に思う]という困難があった。これは学生が、患者に苦痛を与えてしまいそうな技術の提供を求められた時に自己の技術の未熟さを自覚し、患者の苦痛を引き起こすのではないかと心配している（阿部、2009）と同様の結果である。本研究では他に、[離床を進めなければならないが患者は疼痛の訴えがあり、どちらに援助を行うべきかという葛藤が起きた]という困難があった。初めて周手術期にある患者を受け持った学生は、患者から苦痛を訴えられ、どうしたらいいのか分からず動揺し、緊張感が増す。さらには、苦痛を受け止めながら援助も考えなければならず、難易度が高いといえる。

高比良ら（2016）は、学生が直接観察を経験することはむずかしいため、看護師をモデルとした観察学習を行い、実践に活かせるようロールモデルによる指導の必要性を述べている。本研究では、患者への対応に様々な不安を感じていることが明らかとなっていた。まずは、教員は学生の不安を受け止めることが必要である。そして、学生にすぐさま援助を実施させるのではなく、臨床指導者や教員がロールモデルとなり、実際の観察や援助の場面を学生に見せる指導方法を実践することが再認識された。

2. 成人看護学実習（周手術期）における看護学生の困難：心理的・社会的側面

身体的側面に比べて少数であったが、単に心理的及び社会的な側面に関する困難が少なかったことを示すのではない。本研究では、<短時間での実習展開が難しい>というサブカテゴリーが生成され、[短期間でのコミュニケーションをどのようにとれば良いのかわからない]、[短い期間での情報収集やケアの難しさ]を感じていた。一人前の看護師であれば、経験に基づき短時間で意図的に患者から様々な情報を引き出し、援助を考えることができる。しかし、周手術期にある患者と初めて関わる看護学生は、患者の状態のアセスメントや看護に対する患者の反応を正確に知覚する能力が未熟であると言われている（杉森ら、2012）。このことから、意図的に情報収集するスキルが未熟で、収集した情報や手術に関連する状況、患者の思いなどを想起し、解釈するには時間がかかる。周手術期の展開が速いこと、限られた実習期間や患者と関わる時間が短いことが心理的・社会的側面に関する困難につながっていることが推察される。

佐藤（2001）は、成人看護学実習において学生は、手術による身体機能や形態変化の理解で終わってしまうことが多く、手術がその人のこれまでの人生や生活、これからの人生や生活にどのような意味をもたらすかまでかを考える時間もなく、慌ただしい術後急性期のケアに追われていることを課題に挙げている。本研究では、[手術のことなど心理的な面についてどう尋ねたらいいのかわからない]、[退院後の生活への具体策が提供できなかった]といった困難があった。短い実習期間の中で学生は、目に見えやすい身体的な側面に注目しがちで、心理的及び社会的側面への対応の機会を持つことが難しい、あるいは機会があっても対応までに至れないことが考えられる。今後は、周手術期にある患者の心理的及び社会的側面の情報収集や対応方法について、学生がどのような体験をしているのか、より具体的に明らかにすることが示唆された。

VII. 本研究の限界と今後の課題

研究対象とした8文献で、研究目的が困難に焦点を当てたものは少数で、その他の研究目的は学生の学び、患者の援助関係の形成や看護実践力の獲得に焦点を当てたものであった。また、術後の一場面に焦点を当てた文献があり、それらを分類・整理した結果、実習場面に偏りがあった可能性がある。よって、実習全体における困難を満遍なく捉えきれなかったことは本研究の限界である。特に、心理的・社会的側面に関する困難については、不明な点が多い。今後は、成人看護学実習（周手術期）において明らかになっていない場面を含めて丹念に調査することが必要である。

VIII. 結論

本研究は、国内の8文献を対象に、成人看護学実習（周手術期）における看護学生の困難について整理した。

結果、60コードから10サブカテゴリーが見出され、【状態変化への困惑】、【術後対応の苦境】、【実習環境による影響】、【事前・事後学習の不足】の4つのカテゴリーに分類された。

成人看護学実習（周手術期）において看護学生は、患者の手術侵襲による身体的側面に対する状態変化に戸惑い、術後の対応に多くの困難を感じていた。心理的及び社会的な側面に関する困難は少数であったが、単に困難を感じていないのではなく、短い実習期間において十分に情報収集ができないことや対応が難しいことが推察された。

本研究における利益相反は存在しない。

文献

阿部智美 (2013). 患者とのコミュニケーション困難場面における看護学生の「解説, 問題解決, 感情」との関連. 日本看護研究学会雑誌, 36 (1), 149-156.

千田寛子 (2011). 成人看護学実習における看護学

生の抱える困難感の分析. 群馬保健学紀要, 32, 15-22.

福本仁美 (2014). 成人看護学実習における看護学生の学習困難に関する研究の動向—過去5年間の先行文献から—. 新見公立大学紀要, 35, 107-111.

厚生労働省 (2017). 3 平均在院日数. 平成 28 年医療施設（動態）調査・病院報告の概況. https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/iryosd/16/d1/02_02.pdf.

三浦香織, 渡邊一枝, 浅野美知恵 (2006). 臨地実習における学生の困難な体験と臨床指導者による効果的な学習支援. 順天堂大学医療看護学部医療看護研究, 2(1), 45-52

中本明世, 伊藤朗子, 山本純子, 松田藤子, 門千歳, 横溝志乃 (2015). 臨地実習における学生の困難感の特徴と実習状況による困難感の比較—基礎看護学実習と成人看護学実習の比較を通して—. 千里金蘭大学紀要, 12, 123-134.

中谷啓子 (2004). 看護学実習における学生の学習経験に関する研究—「『失敗』な気持ちで終わった」の意味するもの—. 東海大学短期大学紀要, 38, 39-44.

佐藤まゆみ (2001). 成人看護学実習における現状と課題—周手術期患者の看護実習より. Quality Nursing, 7 (3), 47-50.

杉森みどり, 舟島なをみ (2012). 看護教育学. 東京: 医学書院.

高比良祥子, 山田貴子, 吉田恵理子, 片穂野邦子, 松本幸子 (2016). 看護学生が認知する術後観察場面での看護師の関わり. 長野県立看護大学紀要, 15, 1-10.

高比良祥子, 吉田恵理子, 片穂野邦子, 松本幸子, 山田貴子 (2016). 看護学生が抱く手術直後患者の観察における困難感と対処. 日本看護研究学会雑誌, 39 (4), 115-124.

安酸史子 (2015). 経験型実習教育. 東京: 医学書院.

Abstract

This study aimed to evaluate the difficulties faced by nursing students in adult nursing practice (perioperative period) and to get suggestions for future clinical training. A total of 8 key documents were reviewed and 4 relevant themes were identified, namely: (1) managing change, (2) postoperative care; (3) effects of the training environment, and (4) insufficient preparation and learning. The students were found to have had a lot of difficulty in coping with the physical aspects of the surgery and responding after surgery. Faculty members felt that their teaching method using a role model was effective, while accepting that many nursing students were anxious when seeing the surgery and its effects. In addition, although there were few difficulties concerning psychological and social aspects the main difficulty was the short training period in which the teachers could not impart enough information on how to respond to the patients.